

戦時中の思い出

中村 ナツ子

美深の町

私は、昭和 14 年 4 月に道北の小さな町、美深の美深小学校に入学しました。家は、農業でしたので学校まで 4 キロの道を歩いて通いました。その当時は友達もみな同じように歩いて通うのが当たり前でしたので、学校へ行けることが楽しく、とても平和であったと思います。その翌年の紀元二千六百年^{*1}は、とても活気に溢れていたような気がいたします。

そして昭和 18 年 12 月 8 日のあの第二次世界大戦が始まりました。徴兵検査に合格した青年、又は召集令状を受けた小父さんたちが次々この町から万歳万歳の声に送られながら入隊していきました。「お国の為に命を捧げることが一番美しい」と教えられていた私達は日の丸の旗がちぎれる程に振りながら兵隊さんを見送ったものです。

義兄出征

昭和 18 年の春、江部乙村に住んでいた私より 20 歳年上の姉の松岡ヨシエの夫、松岡才作さんに召集令状がきました。農業をしていた姉夫婦には 9 歳を頭に 4 人の子供がいました。おまけにお腹に 5 番目の赤ちゃんが宿っていたのです。ちょうど田植えの始まる少し前頃だったと思います。義兄が兵隊に行ってしまった後、親戚の人や近所の方々のお世話になりながら田植えもようやく済まし、その年の 6 月の末、姉の次男の貞二君が急に腹痛に見舞われ、二度三度と医者への往診を頼みに行ったのですがどうしても往診してくれず、6 月 29 日小学校 2 年生の貞二君の生命が失われてしまったのです。

義兄の留守の間に次男を亡くした姉の心の中はどんなにか辛かったことであろうかと思います。それから 1 月も経たない 7 月 21 日に身ごもっていた赤ちゃんが誕生しました。男の子であったので長男の正一君は「亡くなった貞二の生まれ代わりに男の子が生まれました。良かった、良かった」と、とても喜んでいたそうです。

隣家にも召集令状が

また、その年私の隣の家の伊藤清さんにも召集令状が来て 12 月 10 日の夜行列車で横須賀海軍飛行機整備兵として入隊をしました。その時、奥さんのトシ子さんは 5 か月の赤ちゃんを宿しておりました。当時 9 歳の政さんを頭に 5 歳の民子さん、3 歳の久子さん、1 歳の左代子さんなどを残していく清さんの心のうちは、そしてまた、残されたトシ子さんの気持ちはどんなにか辛かったかと思います。

次の昭和 19 年からトシ子さんは、馴れない男の仕事もしなければならず、身重の身体で初めて馬に道具を掛け農作業をしたのでした。そして出産する日まで働いていたそうです。生まれた赤ちゃんは女の子で、5 月に生まれたので、サツキちゃんという可愛い名前がつけました。

戦時中の暮らし

徴兵検査甲種合格した私の兄も昭和 19 年の 4 月に旭川第七師団に入隊して、隣近所の家々も年寄と女と子供ばかりが、留守を守るのに必死なのでした。父が昭和 17 年に病気で亡くな

っており、母は病弱なので、兄が兵隊に行った後は、高等科を卒業したばかりの次兄と姉とで、馬で田を耕したりして農業を支えていたのです。私も度々学校を休み家の仕事を手伝ったりしました。

また、秋の収穫時期には援農の学生さんが泊り込みで働いてくれたことも記憶しています。小学 6 年生の私たちも学校から度々農家へ援農に出向いたものです。それから土管を作る町工場などへも働きに行き、教科書などは所々飛ばして習ったものです。

昭和 20 年のまだ北国の雪深い 3 月初め頃、軍事用の飛行機の糊の材料にするために私たち生徒は山へトドマツの枝を取りに行き、松脂だらけになって働いたこともあります。6 年生卒業を目前にした或る日のことです。受け持ちの先生が「貴女たち農家の人はどうせ高等科にあがっても作業ばかりだから、6 年生卒業したら家で農業をした方が良いでしょう。」と言うのです。その頃は、仕事をしないで家にいると女でも徴用にかかる時代でしたので町のお嬢さん方など女学校へ進学する人が結構いたようです。女学校、中学校、高等科の生徒は作業ばかりの毎日でしたので、先生は家族のため、お国のために良いことと思って農業を手伝ったほうが良いと勧めてくれたのだと思います。女子組の私たちのクラスの半分位は農家でしたので、その農家のほとんどの生徒が修学旅行、卒業の記念写真もないままに小学校 6 年生卒業で学生生活の終わりを迎えたのです。

伊勢での戦病死

その年の 4 月に横須賀海軍に入隊していた隣のご主人、伊藤清さんが危篤だとの知らせを受けた奥さんのトシ子さんは、舅さんと一緒に横須賀に行くことになり、出発する日の朝、隣の子供たちを家で預かるため、そしてトシ子さんの見送りのために伊藤さんの家に行きました。すると赤ちゃんにお乳を含ませているトシ子さんの目から大粒の涙がほろほろと落ちているのです。見ている私もつい貰い泣きしてしまいました。栄養不良で発育の遅れた生後 10 か月のサツキちゃんを残しての出発なのです。トシ子さんの辛い気持ちが痛いほど私の胸に伝わってくるのです。その後、育児に大変だろうと札幌にいるトシ子さんのお姉さんが、サツキちゃんを連れて行きお世話をしてくださっていました。

トシ子さんは清さんのいる横須賀へ行く途中に空襲にあい、その度に列車から飛び降りて物陰に隠れ、敵機の去った後、また列車に乗ってやっとの思いで横須賀海軍病院に着くと、横須賀はあまりにも空襲が激しいので、ご主人は伊勢の山田赤十字病院に移されていて、なかなか汽車の切符を買うのに難儀をしましたが、何とか山田赤十字病院にたどり着き、清さんの看病が始まりました。清さんは歩くこともできない状態だったそうです。度々空襲があり、ほとんどの人が防空壕に避難するのですが、歩くことのできないご主人の清さんを置いて行くわけにもいかず、空襲の時もご主人のそばを離れずに爆音に怯えながら付き添いをしながら一度も防空壕には入らなかったそうです。

昭和 20 年 4 月 26 日、伊藤清さん戦病死。軍の方でいろいろ手配して頂き、遺骨と共に北海道の美深の自宅への帰路に向かいました。身内の人たちが函館まで迎えに行き美深の駅に到着したのは 4 月 30 日で、その日はまだ雪も残っており、小雨の寒い日でありました。駅の中から白い布に包まれた遺骨を抱えて出てきた息子さんの政さんの後からトシ子さんが遺影を抱えて出てこられました。出迎えに行った人々と共に私も涙がこぼれて仕方ありませんでした。

その年の 6 月にお姉さんの所に預かっていたサツキちゃんが亡くなられたそうです。長男

の政さんが中学校を卒業するまで、親戚や近所の手伝いを受けながら、トシ子さんは無我夢中で農作業をやりとおし、子どもさんたちを育てました。勿論子供さんたちもずいぶんと苦労されたことと思います。

終戦を迎える

昭和 20 年、私は小学 6 年を卒業したその年から姉や兄と毎日田や畑に出て農作業に励みました。仕事をするのは嫌ではなかったのですが、やはり学校へは行きたかったですね。終戦を迎え、このあと一体どうなるのかと家族や近所の人々と涙を流しながら語りあったことも、今もなお私の脳裏に浮かんでまいります。

終戦を迎えた時に千島にいた江部乙の松岡さんの義兄才作さんは千島からソ連へ抑留され、音信不通の状態でありました。あとで聞いた話ですが、カムチャッカ半島先端あたりのマガダンというところに抑留されていたのだそうです。

江部乙での収穫の手伝い

その終戦の年の秋、女手一つで農業を守り、家族を守っている江部乙の姉の家へ私は秋の収穫の手伝いに行きました。姉の家には小学校 6 年生の正一君、2 年生の武夫君、4 歳の和子ちゃんと 2 歳 3 か月の幸夫ちゃんの 4 人の子供がいます。

長男の正一君は学校から帰ってくるとすぐに私たちと並んで稲刈りを手伝いました。3 ヘクタールの田んぼの稲を一株一株手で刈り取るのです。ある程度刈り取ると田んぼに稲架木を担いで運び稲架木を組み立てるのです。普通は男のする仕事ですが、馬の世話から何もかも姉がしなければならないのでした。学校から帰って来た正一君も無我夢中で手伝ってくれました。刈り取った稲を夜なべに稲架に掛けて、また次の田んぼで稲を刈り、幾つも幾つも立てられた稲架の稲が乾燥すると稲架から下ろし稲を納屋に運び入れて積み上げるのです。何しろ忙しいので三男の武夫くんが学校から帰ってくると、小さな和子ちゃんや幸夫ちゃんの面倒を見ながらご飯を炊いてくれることも度々でした。

夜なべに足踏みの脱穀機で稲こぎをするのですが、なかなか捗りません。動力用の燃料が配給にならないので足踏みの機械で脱穀するしか仕方がないのです。稲が納屋に入りきらなくなると納屋の近くまで運び、丸く積み上げるのでした。すっかり稲架の稲を運び終わった頃には、雪がちらついてきて寒さも一段と加わってきます。

それからは毎日姉と二人で足踏みの脱穀機で稲をこぐのですが、埃と汗で顔も身体もびっしょり、正一君が学校から帰って来ると手伝ってくれるので、私は風呂を沸かしたり夕食の支度をして子供たちに食べさせて寝かせるのでした。

幾日も幾日も足踏み脱穀機で稲こぎをしてようやく終わり、トウシにかけ、トウミにかけてやっとな倉に粳が一杯になり愈々粳すりです。親戚の叔父さんが粳すりの機械を運んできて大勢の人たちで粳すりが始まるのです。私は手伝いの人たちの食事の支度をするようになりました。

12 歳の私には、大勢の手伝いの人たちの食事の支度をするのは初めてでした。自信がないけれど懸命に食事の支度をしました。手伝いの人たちのおかげで 1 年間の収穫をしたお米が俵につめられて納屋に積み上げられました。それは 12 月の 8 日だったともいます。

これでようやく美深の我が家に帰ることができると思い、私の心は浮き浮きしていました。ところがその次の夜、姉の右の人差し指の先が痛み出したのです。明くる日、滝川の病院まで診てもらいに行ったのです。江部乙の町まで 6 キロの道を歩いて行き、汽車に乗って滝川まで行くので、帰って来るのは夕方です。医者に診てもらったらひょう疽と言われ、すぐに手術をしたのです。

そんなことで炊事はもちろんのこと自分の髪をとかすこともできないのです。私は炊事や洗濯、そして小さな姪や甥の面倒と留守番で我が家に帰るどころではなくなっていました。包帯に包まれた姉の指は痛々しく、毎日滝川の病院まで通うのです。

年の暮れに正月用の餅つきを済ませ、姉の指も少しずつ使うことができるようになったので、12 月 30 日に懐かしい我が家へ帰ることができました。兵隊に行っていた兄は女満別で終戦を迎え、11 月に復員*2 してきたので家族揃ってお正月を迎えることができました。

義兄の復員

昭和 24 年の秋、私は例年の如く姉の家を手伝いに行き、稲の収穫を済ませたばかりの時でした。新聞記事のソ連からの復員名簿に「松岡才作」とはっきりと出ているではありませんか。姉や甥たちと飛び上がって喜びました。

近所の人や親戚の人たちが集まってくれ、帰ってくる汽車の時間などをいろいろ調べてくれて函館まで迎えに出てくれた人もいました。出征の時に姉のお腹にいた幸夫ちゃんが 6 歳と 4 か月になっておりました。親戚や近所の人に伴われて、義兄が 6 年ぶりに妻や子供の待っている家に帰ってくることができたのです。初対面の父と子。「おお、幸夫か」と義兄は手をさし出しました。

幸夫ちゃんは、黙って後退りして恥ずかしそうでしたが、すぐに懷いて膝の上に抱かれていました。

* * * * *

こうして近所の人や親戚に助けていただきながら、水田を守り、子供たちを守り、長い年月を頑張り続けた姉、そしてまた、カムチャッカ半島の厳寒の中で、ひもじい思いをして抑留生活に耐えてきた義兄により、ようやく暖かな生活が甦ってきたのです。

(なかむら なつこ 昭和 8 年生まれ)

***1 紀元二千六百年** 紀元（皇紀）は、日本書紀に基づき、神武天皇の即位の年を元年として起算したもので、西暦よりも 660 年古い。昭和 15 年、国を挙げて紀元二千六百年の記念式典が行われた。

***2 復員** 終戦や召集を解除されたことにより、兵員が帰郷すること。